

## Dr. Suzanne Flynnと一緒に みんなで考えてみよう！「ことばについて基本的なこと」

ヒッポと一緒に共同研究に取り組んでくださっている MIT のスザンヌ・フリン教授(言語学・多言語獲得研究)が2025年3月に来日。今回は広島と東京での講演会やワークショップでお話されました。ヒッポと先生とのつながりのきっかけを作った LEX America の Executive Director のエリザベスも全行程に同行。東京でのワークショップには東京大学大学院総合文化研究科の酒井邦嘉教授(言語脳科学)も参加してくださいました。当日、スザンヌさんが講演会・ワークショップで話してくださった内容の要約を紹介します。

(文責:まいにち多言語編集チーム)



### 言語のどの部分に興味がありますか？

より多くの言語を知っていると新しい言語の習得が簡単になるのはなぜなのか、当たり前の事実だとわかっているけど、その理由に興味があります。

### 東大・MIT・ヒッポの共同研究から分かったこと

脳の中に言語処理に関係する部分があることを確認できました。そして、知っている言語が多ければ多いほど新しい言語の習得が早いということが fMRI を使った研究で証明できました。この研究はこれまでされたことがなく、科学的に証明されたことに価値があるのです。

### 言語習得の自然な方法とは子どもと同じ環境

子どもたちは家庭でどのように言語を習得するのか。ただ観察し、音を聞く。それが自然な方法です。子どもはことば、単語や動詞の活用などを記憶するのではありません。自然な環境(naturalistic setting)の中で、自分のペースで、間違いもしながら、観察して、自分で直しながら見つけていくのです。

ヒッポはそれに限りなく近い環境を作っています。SADA をして、家の中のどの部屋でも SD の音を聞き、お互いに様々な違う言語で話し、ホームステイをし、自分の母語に頼らず、できるだけその言語を使い、その言語の中に居続けよう(staying in the language)とします。私が学校でスペイン語を学んだ時とは違っています。ヒッポは自分が実践したかったことであり、ヒッポの理念(principle)が私の研究していたことと重なりました。

### 全体から部分へ、赤ちゃんは教えられて言語を習得しているのではない

マザリーズと呼ばれている、自然に子どもにしてしまう話し方があります。ピッチが高くなる、同じことをいろいろな言い方で言う、今やっていること(here and now)について言うなど…。単語ではやらない、文全体(whole sentence)で話しかける。そこから子どもはその言語の特徴的なパターン(critical features)を識別することができます。そして、これは生得的な力であり、同じことが大人の言語習得でも起こることがわかっています。

だから、細かいところ(部分)から教えても役に立たない。語彙(vocabulary)は増えるけど、構造(structure)を習得することにはつながらない。全体を聞いて、そこから特徴的パターンをつかむことが大切です。

ことばを習得するには間違いを聞く必要があります。人が間違った時に止まって入る間や、息継ぎ(pause)などは、言語の構造をつかむのに大事な情報なのです。それを手掛かりにして、どこがその文章の中のひとかたまりなのかのかわかり、文構造(syntax)を習得するのに有効です。

## 臨床セラピスト、言語聴覚士としての私の実践から学んだこと

言語習得に困難を抱える子どもや大人は、多くの場合、十分に言語を聞いていなかったということがわかりました。ヒッポでは言語が聞こえてくる環境があることが大事だということを直感的にわかっていて、できるだけ多くの言語に、様々な方法で、また様々な文脈(context)で触れさせています。あらゆる活動、あらゆる方法で言語を聞くことすべてが、その言語に関する知識の発達にとって重要です。

## 失語の人に「歌」を使う治療方法がある

もともと話していた言語が話せなくなってしまった人に対しての治療方法として、「歌」で質問に答えさせるということがよくあります。赤ちゃんが話し始める時に最初はイントネーション(らしさ)からつかんでいく様子と、歌を歌うということはよく似ています。歌うということが言語の再習得の切り口となるのです。ヒッポがやっている『ことばを歌う』という行為も同じです。

ただ歌を歌っているだけでは言語のすべてはつかめないなので、そのことがそのまま何でも話せるということにすぐには結びつかない。話せるようになるためには、人と向き合う、直接対話することも必要で、input と output とが両方あるというのがすごく大切です。

## ことばを習得するには多様な人からのことばが必要

私たちが知っていることは、言語を習得するためには言語があることが必要で、たくさんの違う話し手からの言語があることが必要ということです。脳にはバリエーションが必要で、いろんな違う人たち、お年寄り、子ども、男の人、女の人、(地域によって)違うアクセントで話す人など、いろんな種類のことばが聞こえることが大事なのです。そしてヒッポはそれを実現しています。



## 言語の違いは実は小さい

例えば音のシステム(sounds system)で言うと、存在する音はすごくたくさんあるけれど、言語で単語を作るために使えるすべての音(音素)はとても小さい範囲に限られています。その音を使って、脳がことばをつくります。

文法構造も同じです。私の一番最初の研究で日本語話者とスペイン語話者が英語を学ぶ時の比較研究をしました。両者には学習パターンに違いがありました。日本語話者は子どもが英語を第1言語として習得する時と同じように0から習得するのに対して、スペイン語話者はもっと先の間より上くらい

の段階から習得する。日本語の構造は SOV、スペイン語は SVO で英語と同じ構造(structure)を持っています。言語の文法構造がどれくらい似ているかが次の言語の習得に役に立つ(helpful)ということが分かりました。そして知っている構造が増えるほど楽になります。

だから、これらの言語の音の範囲、文法構造のパターンを知れば、脳がその知識を使って、新しい言語を習得することができるのです。

## 多言語の利点

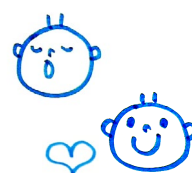
個人的な対人関係のレベルでは、複数の言語を知ることによって世界中の人々となつなげることができます。いろいろな人となつなげるということは、その人の文化・生き方(human nature)を深く理解することにつながります。それは社会的にとっても重要なことです。もっと多くの政治家が多言語人間だったら、もっと世界はよくなるでしょう。

認知(cognition)のレベルでは、複数の言語を知っていることは、

- ① 抽象的思考力(abstract thinking)、物事の本質を抜き出して考える力
- ② 数学の能力
- ③ 比喩的な表現(figurative language)の理解力

といった点で特に優位性が見られます。またその優位性は子どもにも大人にも見られるという研究結果があります。

多言語話者であることの影響は計り知れないということです。メリットは数多くあり、非常にプラスの影響を与えています。だから私はマルチリンガルになりたい！



## 日本語と韓国語・バイリンガルでの子育ての悩みに対して

アメリカではよくある質問です。韓国語で話しかけることをやめないで、もし子どもが日本語で返してきても怒らないで、ヒッポ＝多言語を続けてください。多言語で話すことがよい(prestigious)ということ、生き方、豊かさを親が見せてあげてほしい。実際にアメリカでは自分が要らないと思った弱い方の言語にもう一度興味を持つというケースがよく見られます。

## 言語はなぜ変化するのか？

言語学者も心理学者も言語を生きているものと捉えます。生きている言語というのは、世代によって、話され方と構造の両方において少しずつ変化するものです。

- ① 人々が隔離されることで言語が変化するケースがあります。例えば、山のこちら側とあちら側で元は同じ言語を話していたけれど、少しずつお互いに変化し、結果的に二つの違う言語になったりすることもあります。
- ② 国境などの近くで二つ以上のことばが話されている場合、それぞれの言語がお互いに影響しあって、元の言語から変化することがあります。

例えば、英語は元々は前置詞と直接目的語を省略できない構造を持っているのですが、若者ことばで I'll go with you⇒I'll go with のように you を省略する言い方が生まれています。このように

英語の構造が変わってきていて、ポルトガル語(目的語が何を指しているのかを文脈に頼る言語)に似てきています。中国語も、元は主語を省略できない構造を持っていましたが、最近、少しずつ変わってきています。

## どこから方言になるのか？

何が言語かを決めるのは政治的要因が大きいと言えます。例えば中国ではいろんなバリエーションがありますが、みんな「中国語」を話していると思っています。でも言語学者的には違う言語です。別の例でヨーロッパの中の似ている言語、スペイン語、イタリア語、フランス語などのロマンス言語は中国語的に言えば「方言」で、言語間の違いは中国語の方言の違いと同じくらいでしかない。でも国が違うから、違う言語とされています。

さらにもう一つの例として、ピジンやクレオールがあります。元々貿易言語のピジンは文の構造がとてもシンプルです。そのピジンを子どもたちが習得することでクレオール語になるのですが、クレオールを言語として認めない人もいます。

例えばハイチでは、家ではクレオール語を話し、学校ではフランス語が使われていて、この二つは全く別の「言語」なのです。南太平洋にはいろいろなクレオール語が存在します。言語として認めていない人もいますが、実質的には言語なのです。パリのフランス語はモンリオールのフランス語より良いとされたり、スペインのスペイン語をプエルトリコやメキシコのスペイン語よりも上に見るのも政治的要因で決められた枠であり、言語として純粋に見ればどれも皆同じように価値・働き・要素を持っています。

つまり方言も言語です。例えばアメリカでは Black English などの現地語(vernacular)は方言だとする人もいて、それを話す人＝教養のない人とされていますが、言語的要素を持った立派な価値のある言語です。

## AI が人間のように話せるかと言うとまだ実現していない

AI は一番大事な人と人とのコミュニケーション(interpersonal communication)に必要な要素を排除してしまいます。すべての言語の音やルールを学習できたとしても、人間と同じコミュニケーションができるようになるには程遠い。言語の知識は一瞬で習得できるかもしれませんが、人間のような会話(conversation)はできない。躊躇することや微妙な調整、会話の軌道修正などは難しい。AI ≠ 人間の脳。サブリメント(補助機能)でしかなく、対話を完全に置き換えることはできないでしょう。

## ことばを話すから人間

人間以外の種は非常に限られた方法でコミュニケーションをとります。例えばヘビやライオンは call して仲間と意思疎通はできる。でも、だませない。来ないのに来るとは言えない。しかし、人間は複雑な言語体系を持っている唯一の種で、複雑な思考を人々との間で表現することができます。つまり、人間の言語を持っているということがあなたが人間であるということなのです。

